

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">譚 昕</p> <p style="text-align: center;">【比較社会文化学専攻 平成24年度生】</p>	要 旨
論 文 題 目	<p style="text-align: center;">テキスト言語学の観点からみた中国語におけるテキストの結束性 ―二つの非明示的表現を中心に―</p>	<p>本論文は、現代中国語におけるテキストの結束性について、二つの非明示的表現を取り上げ、考察したものである。第 1 章で、論文の概要と構成、第 2 章で、理論上の枠組みを述べた後、第 3 章では、中国語のゼロ照応、即ち、先行文脈にすでにある表現に対し、音形を持たないゼロ形式で言及する形式について考察し、実際に小説から照応のデータ（ゼロ照応、三人称代名詞、名詞句照応）を収集して比較を行った。その結果、先行研究では、ゼロ照応が最も結束性が強いと言われていたことに對し、実際には、内容的結束性の弱い文脈では、ゼロ照応ではなく、三人称代名詞がテキストの結束性を強めるために用いられることを明らかにした。第 4 章では日本語のゼロ照応との比較を行い、先行研究では、日本語は中国語よりゼロ照応が多いとの指摘があるが、日本語では、登場人物の数に関わらずゼロ照応が使われるのに対し、中国語では、登場人物が少なく指示の曖昧性が生じにくい場合にゼロ照応が使われることに違いがあることを指摘している。第 5 章と第 6 章では、もう一つの非明示的表現として中国語の“X 的\emptyset”形式を取り上げ、代用や例示の方法を通して、テキストの結束性に貢献していることを述べ、第 7 章で論文の内容を総括している。</p> <p>第一回審査会においては、本論文に対し、結束性理論を用いて分析することの意義が説明されていないこと、章の見出しとして不適切な表現があること、主観性などの専門用語の説明が不足していることなどが指摘された。本申請者はそれらのコメントを受けて修正し、第二回審査会では、ほとんどのコメントが反映されているとの評価を得た。だが、新たに追加した参考文献や注の書き方について改善を求められ、再度修正した後、第三回審査会において、要求された水準に達したとの評価を得た。</p> <p>公開發表会においては、明快に論文の内容が発表され、会場からの質問に対しても、的確に応答しており、著者が高い専門性を備えていることが示された。以上から、本審査委員会は、本論文を博士論文として十分な水準に達していると判断し、博士（人文科学：Ph.D. in Linguistics）の学位に相当するものと認めた。</p>
審 査 委 員	(主査) 准教授 伊藤 さとみ	
	教授 伊藤 美重子	
	教授 和田 英信	
	准教授 野口 徹	
	助教 本林 響子	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（ 可 ・ 否 ）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> </div> <p>※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	

